



# 全国市長会欧州・東欧都市行政調査団調査報告

団長  
ふくろい 袋井市長  
はらだひでゆき  
原田英之

## はじめに

7月18日の昼、成田空港に集まった欧州・東欧都市行政調査団のメンバー10名は空港待合室で簡単な団結式を行い、梅雨が明けて強い日差しがはじまった日本を後に、KLMオランダ航空でチェコ共和国の首都プラハへ向かった。

最初の訪問国チェコは、約20年前に社会主義から民主主義に変わり、2004年にはEU加盟を成し遂げたが、ユーロへの通貨移行はしておらず、消費税は食品や薬品などが10%、そのほか20%となっている。この国では教育と伝統を活かしたまちづくり(景観行政)に関する調査を行った。

## プラハ市の教育について

プラハ市では、教育委員会青少年・スポー



プラハ市教育委員会を訪問(左から4人目が筆者)

ツ局長のパベル・ドルティナ氏が応対してくれた。

した。

ここは、プラハからドイツ国境へ向かう途中に位置し、人口17万人でチェコ第4の都市で日系企業をはじめ、数多く企業が進出している。

パベル・レドル市長と表敬のあいさつを交わした後、中世の歴史を残しながら、新しい街づくりをしていく工夫と苦労について話を聞いた。

文化財局が岩となって相当厳しい姿勢で街の



ビルゼン市長表敬訪問の様

歴史を資産として守っている一方で、市勢の発展のため外国企業も積極的に受け入れている。

このような施策の調和により、比較的恵まれた財政状況を整えることも景観行政を進めていく上での一助になっていると感じた。

また、日本からの客人として、私たちのために副市長主催の昼食会も開いてくれた。

会場を案内してくれた若い女性職員がこっそり「嫌いな国はドイツ、ロシアなどの大国で、好きなのはフランスやイギリスなど小さな国」と話してくれたのは、ヨーロッパの列強に挟まれ、近世において大国に踏みこまれた歴史を持つこの国ゆえと感じるとともに、島国で育った日本人とは、諸外国に対する感情や文化に対する考え方が全く違っていることも納得した。

## レリースタットの有機農業について

次の訪問国であるオランダでは、農業と環境問題についての調査を行った。

オランダに移っての初日は、有機農業センターとアムステルダム・ソーラータウンを訪問した。

アムステルダムの北東一時間のレリースタット市にある有機農業センターは、市が指定した300haの有機農園専用地にあり、少人数のNPO法人が運営している。最近、オランダではオーガニック食品に対

チェコの教育制度は3段階で、初等・中等教育は6歳から9年間の義務教育となっている。日本と同じであるが、その後の進路は多岐で、ギムナジウム(普通科高校)、あるいは技術や商業などの専門学校、職業訓練センターに進み、その上に大学が置かれている。また、ギムナジウムでは中高一貫教育も進められている。

校長が公募制と聞いて驚いたが、近年学生数が減って、専門学校や大学に入りやすい状況になっていることは、日本と同じだ。

教育の理念が「民主主義の徹底」と聞き、戦後の日本の教育目標が「平和」であったことを思い出した。体制や制度が変わっても国民の価値観が変わり根づくまでには長い歳月を必要とすることがわかる。

## ビルゼン市の景観行政について

次に、ビルで有名なビルゼン市を訪問

する市場ニーズが高まっており、小売業者からの注文をはじめ、国内最大のスーパーマーケットチェーンの「アルバートハイン」からの受注があると聞いた。

有機栽培の悩みは、機械化に馴染みにくいため、価格が高くなりがちなこと。

さらに、一般農家と隣接すると肥料や農薬の散布など異なる部分が多いので互いに影響を受けない方法を選ぶのが難しいことなど、耕作地の狭い日本で生じている問題と同じであった。

## アムステルフォートのソーラータウンについて

午後は、アムステルダムの南東へ一時間のアムステルフォート市でソーラータウンの視察をした。

市の新しい開発地区のすべての住宅、学校、スポーツセンターにソーラーシステムを取り入れている。

20年前に国のモデル地区助成制度に選ばれて、地域を4つに分け、それぞれにワークショップを立ち上げて、地区ごとに特性を持たせた上で、専門家の大学教授が全体を調整して一つの街をつくりあげている。

はじめのころは、屋根にソーラーパネルを載せることで雨漏りなどの不都合もあったが、今では、国の補助に加え、電力会社から剰電力を高価格で買い上げるので、住民は満



ソーラータウンの様子

足している。  
どの家も南側の窓が大きく、例外なく屋根に同じ色のソーラーパネルが載っている景色はあまりにも単一すぎて、自分がこの街に住むことを連想すると相当な我慢が必要であると思った。

### ハウテン市について

最後の訪問地ハウテン市では、コール・ラマース市長を表敬訪問した後、街の中を自転

車で走った。

自転車王国オランダは、国民1人当たりの自転車保有率は日本の約2倍で、1600万人の国民が1800万台を持っており、その中でもこのハウテン市はクロニンゲン市と並んでその先頭を走っている。

近くで見ていたアルバイト学生に「ツールド・フランスだ」と冷やかされながら、全員で市内に乗り出した。

私の足の長さでは、サドルが高すぎるし、ブレーキも手でなく、ペダルを反対に回す方式なので、はじめは小ささか不安定であったが、後半は慣れて快適であった。

風が強く、冬の寒いこの国で、市民が日常生活に自転車を使うようにするためには、それなりの仕組みが必要である。

その仕組みは、街の設計にあった。この街では、市内の道路を自転車の移動が有利になるようにつくり、仮に自動車を使用する際には目的地までの到達経路が大廻りとなるなど、かえって時間がかかるような仕掛けがデザインされていた。

このような環境保護施策をはじめ、これまでの常識や社会全体の価値観などを変化させ、新たな価値基準に人々を導くためには、自然に誘導できる仕組みづくりが肝要であり、ここにはそれを見習うべき本質があると感じた。

昨今の課題としては、近ごろ若者がバイクで自転車道を高速で走ることだと聞いた。



自転車で住宅街を視察

### おわりに

最終日はアムステルダム市内の運河クルーズ船に乗ってオランダの歴史を水辺から眺めた後、日本に向かった。

今回の調査が有意義に、すべて順調にできたのは全国市長会事務局の方々が的確な訪問先の選定と、添乗員の川尻氏の驚くほどの博学と心配りによるところが大きいと思う。

両者に深く感謝するとともに、成果を市政に活用することでお礼にしたいと思っている。